

台湾の総統選挙と民進党政権の誕生

—政治・風刺マンガの視点から—

朝元 照雄

I. はじめに

中国語には「天変地動」という四文字熟語がある。「地動」とは地震のことを指す。中国では76年の唐山地震で数万人が犠牲になった。「天変」とは、この年には毛沢東と周恩来の死去、4人組の逮捕があった。毛沢東時代の終焉を意味する。台湾では99年9月21日に中部大地震（九二一集集大地震）が発生している。それでは台湾の「天変」とはなんであろう。恐らく後の歴史家は「政権交代」を挙げることだろう。「政権交代」のことを台湾では「変天」という。国民党が台湾を支配して51年、21世紀を迎える寸前で「49年体制」の終焉を告げ、野党の民主進歩党（民進党）に平和的に政権を渡すことになった。

3月18日の夜、中華民国（台湾）第10回総統選に野党・民進党の陳水扁（49歳）と呂秀蓮（55歳）が総統・副総統に選出された。

候補番号⑤番の陳水扁・呂秀蓮組（以下、陳陣営）は497万7,737票（39.3%）、①番の宋楚瑜・張昭雄組（以下、宋陣営）は466万4,932票（36.84%）、②番の連戦・蕭万長組（以下、連陣営）は292万5,513票（23.1%）、④番の許信良・朱恵良組（以下、許陣営）は7万9,429票（0.63%）と③番の李敖・馮滬祥（以下、李陣営）は1万6,782票（0.13%）の得票である（表を参照）。

表 第10代正副総統選挙地域別得票数・得票率一覧

有権者数 15,462,625人 投票者数 12,786,671人 投票率 82.69%

(総統候補) (副総統候補)		陳水扁 呂秀蓮	宋楚瑜 張昭雄	連戰 蕭萬長	許信良 朱惠良	李敖 馮滙祥
北 部	台北市	597,465票 37.64%	631,538票 39.79%	347,564票 21.90%	8,723票 0.55%	1,876票 0.12%
	基隆市	69,555票 30.84%	106,032票 47.01%	48,545票 21.52%	1,116票 0.49%	295票 0.13%
	新竹市	69,760票 33.79%	88,412票 42.83%	46,234票 22.40%	1,746票 0.85%	292票 0.14%
	台北県	741,596票 36.73%	812,821票 40.26%	451,707票 22.37%	10,641票 0.53%	2,384票 0.12%
	桃園県	299,120票 31.72%	413,370票 43.83%	208,881票 22.15%	20,581票 2.18%	1,140票 0.12%
	新竹県	61,533票 24.75%	128,231票 51.58%	51,442票 20.69%	7,093票 2.85%	309票 0.12%
	宜蘭県 (合計)	123,157票 47.03%	86,579票 33.05%	51,082票 19.51%	736票 0.28%	350票 0.13%
	1,962,186票 36.73%	2,286,953票 41.28%	1,205,455票 21.95%	50,636票 0.92%	6,646票 0.12%	
中 部	台中市	193,796票 36.86%	217,486票 41.37%	111,391票 21.19%	2,463票 0.47%	616票 0.12%
	苗栗県	86,707票 26.81%	160,533票 49.64%	71,798票 22.20%	3,931票 1.22%	399票 0.12%
	台中県	305,219票 36.51%	318,499票 38.10%	206,832票 24.74%	4,304票 0.51%	1,176票 0.14%
	彰化県	298,571票 40.05%	251,310票 33.71%	191,685票 25.71%	2,811票 0.38%	1,070票 0.14%
	雲林県	193,715票 46.99%	114,188票 27.70%	102,177票 24.78%	1,230票 0.30%	975票 0.24%
	南投県	106,440票 34.49%	144,863票 46.94%	56,025票 18.15%	914票 0.30%	395票 0.13%
	(合計)	1,184,448票 37.58%	1,206,879票 38.30%	739,908票 23.48%	15,653票 0.50%	4,631票 0.15%
南 部	嘉義市	70,124票 47.01%	43,773票 29.34%	34,670票 23.24%	448票 0.30%	169票 0.11%
	台南市	191,261票 46.06%	114,299票 27.53%	107,679票 25.93%	1,408票 0.34%	580票 0.14%
	高雄市	398,381票 45.79%	259,023票 29.78%	208,544票 23.97%	3,103票 0.36%	877票 0.10%
	屏東県	238,572票 46.28%	131,371票 25.48%	142,934票 27.73%	1,939票 0.38%	692票 0.13%
	嘉義県	157,512票 49.49%	85,890票 26.98%	73,409票 23.06%	920票 0.29%	561票 0.18%
	台南県	347,210票 53.78%	136,217票 21.10%	159,443票 24.70%	1,582票 0.25%	1,164票 0.18%
	高雄県	342,593票 47.14%	206,576票 28.43%	174,021票 23.95%	2,478票 0.34%	1,024票 0.14%
	澎湖県	16,487票 36.79%	17,723票 39.55%	10,418票 23.25%	119票 0.27%	64票 0.14%
	金門県	759票 3.11%	19,991票 81.81%	3,543票 14.50%	105票 0.43%	37票 0.15%
	連江県 (合計)	58票 1.80%	2,362票 73.31%	787票 24.43%	8票 0.25%	7票 0.22%
	1,762,957票 47.48%	1,017,225票 27.40%	915,448票 24.66%	12,110票 0.33%	5,175票 0.14%	
東 部	花蓮県	40,044票 21.42%	109,962票 58.81%	36,043票 19.28%	736票 0.39%	194票 0.10%
	台東県	28,102票 23.20%	63,913票 52.78%	28,659票 23.66%	294票 0.24%	136票 0.11%
	(合計)	68,146票 22.12%	173,875票 56.44%	64,702票 21.00%	1,030票 0.33%	330票 0.11%
総合計		4,977,737票 39.30%	4,664,932票 36.84%	2,925,513票 23.10%	79,429票 0.63%	16,782票 0.13%

(注) 澎湖県は澎湖島, 金門県は金門島, 連江県は馬祖島。

しかし、5組のうち総統選挙に決定的に影響を与えたのが3組である。今回の総統選挙は3つ巴の混戦模様が最後の最後まで続いたのが、特徴の一つである。そして、その関心の高さの反映から82.69%と高投票率を記録した。

II. 陳次期総統の勝因

今回の総統戦で陳水扁（以下、陳候補）が当選した決定的な要因は次の事が挙げられよう。第1に、国民党の分裂である。国民党から離反した宋候補が「超党派」の形で出馬し、国民党の選挙票が分散したこと。このパターンは94年の台北市長選挙時に似ていた。李登輝総統の民主化による既得権益が失われ、不満をもった非主流派の一部分（後に「新党」を組織した）の離党と参戦。3つ巴の混戦の末、民進党の陳水扁氏は「漁夫の利」を得て、民進党から初の首都の長官（台北市長）の誕生となった。今回の総統選挙はまるで台北市長戦の再演であった。

第2に、3月10日にノーベル化学賞受賞者李遠哲（中央研究院院長）は陳候補を支持すると表明、中央研究院院長の辞表を提出し、同候補の「国政顧問」になることを承諾した。陳候補が総統に当選した場合、行政院長（首相に相当）など要職に起用するための布石であると見られていた（その後、李院長は学术界に留まる意向が強いことで、行政院長は外省人・軍人出身の唐飛氏を起用した）。従来、陳陣営は草の根政党で市民層の支持が厚かったが、李院長の支持表明で知識人の共感を呼び、支持層を広げることになった。そのほかに、奇美実業の許文龍董事長（会長）、宏碁電腦（エイサー）の施振栄（スタン・シー）董事長、エーバーグリーン・グループの張栄発董事長、台湾高鉄の殷琪董事長（女性）、義美企業の高志明総経理（社長）などの企業家が国政顧問の就任に要請された。この事は学界（前文建会副主委の陳其南など）、企業界から支持者（特に陳候補の「政権政策顧問16人」の名簿公開）が次々と獲得し、選挙戦における流れを変えた大きな出来事であった。

第3に、中国の「恫嚇カード」は逆に作用した。中国側は2月21日に「一つの中国の原則と台湾問題」（台湾白書）を公表、3月11日に唐家璇外相と15日の朱鎔基首相の恫嚇発言（「恫嚇カード」）など「文攻」は、選挙戦にどん

な影響を与えたのか。前回、96年の総統選挙時のミサイル演習（「武嚇」）と今回の「紙のミサイル」（「文攻」）はいずれも台湾の人民に反感を覚えさせ、中国側の望まない候補を選ぶ結果となった。事実上、前回の96年の総統選挙時に、中国が名指しで非難した「隠れた台湾独立派」の李登輝総統と「顕らかな台湾独立派」の彭明敏（民進党）はそれぞれ1位と2位の得票率であった。前回の「武嚇」は不発であった。今回の「文攻」も中国側が最も望まない候補が当選し、同じように不発であった。中国からどんな圧力をかけても、台湾の住民の投票行動に影響することができないことが明らかになった。「文攻武嚇」は台湾の住民にとってもう通用せず、ただ中国側の無力感だけが残る、面目丸潰れの結果となった。

III. 選挙戦の回顧

今回の総統選挙の特徴の1つに、3つ巴の混戦模様が最後の最後まで続いていたことである。この3つ巴とは、「反国民党の黒金体質」、「反台湾独立」と「台湾意識の形態」の異なるエスニックグループ（「族群」）による投票行動である。これらの動きが、与党・国民党の連候補、国民党から離反した宋候補、野党・民進党の陳候補の選挙票の動きに多大な影響を及ぼした。

選挙前の有権者の世論調査の時点では3陣営はそれぞれ約25%の支持を獲得したが、残りの25%の浮動票の流れがハッキリしていなかった。選挙戦に入った直後には、支持順位は宋陣営－陳陣営－連陣営や陳陣営－宋陣営－連陣営の順であった。宋候補は省長時期の行政手腕や清潔さを売り物にして、反李登輝派などの支持を得ていた。例えば、台湾の有力紙「聯合報」の総統選に関する世論調査によると、99年3月12日～7月24日の10回の調査のうち宋候補は平均38%と強い支持率を得ていた。陳候補の21%と連候補の14%がそのあとに続いていた。9月21日の中部大地震の救援による与党のいわば震災効果によって、連候補の支持率は陳候補とほぼ同じ19%に上昇し、宋候補は32%とやや下落した。しかも、12月10日に宋候補は金銭疑惑（「興票案」）が国民党員によって告発された。

この「興票案」とは次のような次第である。宋候補の義妹・陳碧雲は「中

興票券公司」に勤めていたが、宋の長男・宋鎮遠の名義の通帳を管理していた。この宋の長男の通帳に、91年2月～99年6月までに累計1億408万台湾元（約3億4,346万円）の入金が発覚した。

12月14日に宋候補はこの不明金は「李登輝の指示で蒋家の世話を頼まれた」と釈明したものの、翌日、李総統は「この発言はでたらめで、事実には合わない」と否定した。16日に宋陣営は疑惑資金は2億4,000万台湾元（約7億9,200万円）と自ら公表し、先手を打った。宋は国民党の秘書長時代に、「秘書長の専門帳簿があり、李登輝は知っていた」と釈明した。

22日に財政部長（大蔵相）の邱正雄は、立法院（国会）財政委員会で宋候補の長男と義妹の通帳には宋関連資金が10億台湾元（約33億円）があったと指摘した。調査当局は、宋候補の義妹がサンフランシスコへ600万米ドルを送金したと公表した。そして、米・カリフォルニアには5軒の豪邸を個人名義で購入していることが発覚した。この宋候補の疑惑釈明は選挙民にかえって不信感を植え付けることになった。

この金銭疑惑によって、宋候補の支持率の低下を招いた。そして、宋候補の疑惑は国民党の秘書長時代に発生したことに絡んで、同時に国民党に非難が集まる結果を招いた。宋候補の支持率の低下、連候補の伸び悩みに反比例して、陳候補の支持率がトップに浮上した。

世論調査の結果が投票に影響を与えないための選挙の規定によって、投票の10日前に有権者の世論調査を中止することになっており、誰が優勢で、誰が劣勢であるかは、各地での決起大会（「造勢大会」）での盛り上がり様子によって判断するようになった。

次に、整理された重要キーワードを使って、台湾紙の風刺マンガに沿ってこの総統選挙の経緯を解説する。

(1) 「棄保効応」

「棄保効応」（棄保効果）がいよいよ選挙戦に現れた。「棄保効応」とは、勝ち馬に乗ることで、最も当選させたくない候補者を落とす投票行為である。例えば「棄A保B」の場合、選挙民の本心はA候補を第1希望とするが、当選確率が低いためA候補に投票すると、本心では当選させたくないC候補が

当選する可能性がある。したがって、第1希望のA候補を「捨てて(棄)」、第2希望のB候補に投票することによって、せめてB候補でも当選させたい(投票「保」する)、という意味で使っていた。誰に投票するかを決めていない浮動票をこの「棄保カード」で掌握しようとした。

94年の台北市長選挙の時、現役市長の黄大洲(国民党)、立法委員の陳水扁(民進党)と立法委員の趙少康(新党)が接戦で争った際にも、この「棄黄保陳」現象が発生し、陳市長が誕生した。その結果、現役市長の黄氏は3位に転落し、面目まる潰れの結果になった。今回の総統選挙も同じようなパターンになり、「棄連保陳」現象が発生して、副総統の連候補は3位に転落した。

図1 (『中国時報』3月12日付)。李登輝総統は台湾の民主化を推進したので、「李登輝コンプレックス」(李登輝感情)が存在していた。この李登輝感情によって、「棄保効応」は「棄扁保連」(民進党の陳氏を捨てて、国民党の連氏を保とう)へと動くことになった。一方、李遠哲氏は「化学反応素過程の動力学」を研究、1986年にノーベル化学賞を獲得した台湾で唯一の受賞者である。人々の尊敬を集めたことがこの李遠哲感情である。李総統の要請に応じて台湾に帰り、中央研究院の院長(1994年から)を勤めていた。この事を「台湾の良心」と呼ばれていた。3月5日に李遠哲院長は「断層を乗り越え台湾の未来を掌握する」と題した講演を行った。講演のなかで李は学術研究、教育改革、企業の発展、兩岸関係、環境保護など今後5年以内に上昇と下降の力が分岐点に立っていて、団結してこれらの「断層」を乗り越えれば素晴らしい希望の橋を築くことができる、と意見を述べた。その後、李院長の「棄連保扁」(陳氏の支持)の声明と院長辞表の提出は、今回の総統選挙の流れを変えたと言われている。

図2 (『自由時報』3月14日付)。有力3候補の「棄保効応」の矢先によって、株価の暴落を引き起こした。

図3 (『聯合報』3月17日付)。連候補と宋候補が「棄保効応」のシーソーゲームを遊んでいた。陳候補がその様子を伺っていると、中国軍は陳候補に「俺が「棄保効応」のシーソーで遊んでやろう」と誘っている。

図4 (『自由時報』3月15日付)。演壇に立つ宋候補に対し、支持者は「陳候補の台湾独立万々歳の発言で、みんなが『棄宋保連』(宋を見捨て、連に投



图1 『中国时报』 3月12日付。



图2 『自由时报』 3月14日付。



图3 『聯合報』 3月17日付。



図4 『自由時報』 3月15日付。



図5 『自由時報』 3月12日付。

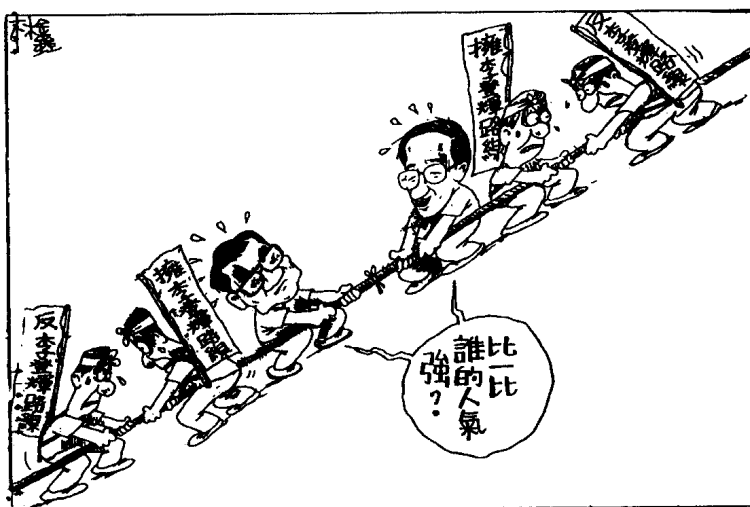


図6 『聯合報』 3月12日付。

票)の“戦場”に行く」と発言した。

図5 (『自由時報』3月12日付)。⑤番の李敖・馮滬祥(李陣営)は新党から出馬したが、選挙戦の後半になると新党の代表は「棄李保宋」(新党の候補を見捨て、宋候補に投票)と発言。このマンガは③番も宋候補の名前にするべきだ、と皮肉ったもの。

図6 (『聯合報』3月15日付)。奇美実業の許文龍会長は「陳候補が李登輝路線に最も近い」と発言。「李登輝路線」が話題になった。李登輝路線に近いのは国民党の連候補と民進党の陳候補である。2人の「棄保」になった。図では連候補と陳候補の綱引き、李登輝路線と反李登輝路線の綱引きが錯綜している様子を描いたもの。

(2) 「李登輝情結」と「李遠哲情結」

前図1にも紹介したので繰り返しになるが、李登輝総統は台湾の民主化を推進したので、台湾の人々は親愛を込めてこれを「李登輝情結」(李登輝コンプレックス=李登輝感情)と呼んだ。他方、ノーベル化学賞受賞の李遠哲氏は人々の尊敬を集めたことがこの「李遠哲情結」(李遠哲感情)である。

図7 (『自由時報』3月16日付)。連候補と陳候補との腕比べであるが、背後には李総統と李遠哲との腕比べであった。宋候補は「アウト」か、と呟いた。今回の総統選挙は李遠哲感情が李登輝感情に勝った結果になった。

図8 (『商業周刊』3月20日号)。これまで中台会談について、国民党は財団法人海峡交流基金の辜振甫を代表として交渉に当たらせていた。しかし、民進党が政権を取った場合、李遠哲を代表として出席する可能性があった。そこで果たして中国の対談相手は誰なのか、と問いかけたもの。

図9 (『中国時報』3月15日付)。中台会談に陳候補の特使として李遠哲を派遣すると発表した。ノーベル化学賞受賞の超大物の“輝く光のリング”が、中国側には眩しすぎないだろうか。

図10 (『中時晩報』3月16日付)。陳候補の特使で李遠哲は「台湾海峡の平和、安定、互いの利益」を主張する。しかし、中国側はそれを「台湾独立・台湾独立」と解釈する。

図11 (『中国時報』3月15日付)。李遠哲が中国に入国した。しかし、金属

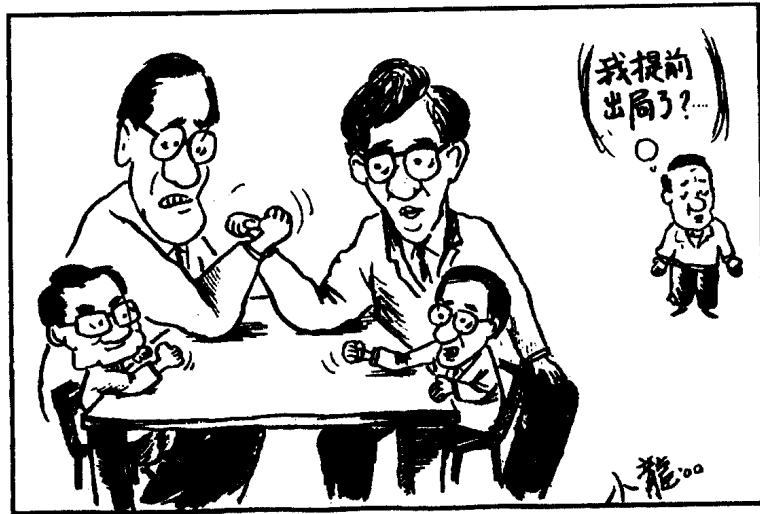


图7 『自由時報』 3月16日付。

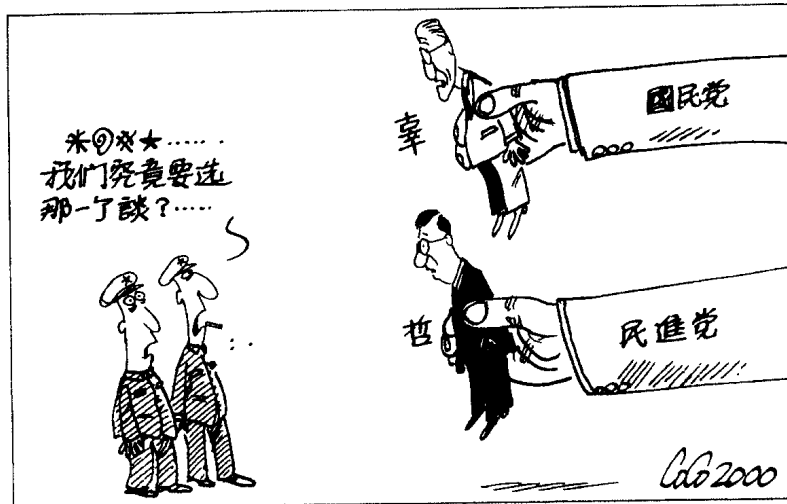


图8 『商業周刊』 3月20日号。



图9 『中国時報』 3月15日付。

探知機でブザーがなり（台湾独立派と見なされた陳候補の特使のため）、「止まれ」と命令された。

図12（『新新聞』第680期 3月14日～18日号）。「李登輝感情」の次は「李遠哲効果」。陳候補はこの「李遠哲効果」という新しい「おもちゃ」をみつけ、リモコンで自分の支持の方に向かわせた。

図13（『商業周刊』 3月20日号）。李登輝総統の在任中12年間の民主化業績は、李遠哲の「黒金（暴力団・金権）改革」で無残にも崩されていく。

図14（『商業周刊』 3月20日号）。「李遠哲効果」は知識人層に影響を与え、多くの有名な企業家達は、李登輝総統が連候補支持と叫んでも陳候補の「国政顧問団」のメンバーに名を連ねた。

図15（『新新聞』第680期 3月14日～18日号）。李総統の持っていた斧が台湾南部の投票圏で折れた。「李登輝感情」は台湾南部の投票圏では効き目がないようだ。開票の結果、宋候補は台湾の北部（宜蘭県は陳候補）と中部に支持率のトップを保っていたが、南部は陳候補の天下である（前掲表を参照）。

(3) 「黒金体質」

「黒金」の「黒」とは暴力団との癒着、「金」とは金権政治。この「黒金体質」は蒋介石・蔣経国総統時代にもあったが、権威主義的政治でコントロールしていたため顕著に表面化に浮かび上がらない。台湾の民主化以後、それが表に浮上するようになった。国民党はこの地方の政治力を存分に利用し、温存していた。地方選挙にこの暴力団のボスは県・市議員に立候補・当選後、その影響力をさらに立法委員（国会議員）に延ばしていた。総統選挙で民進党側が新聞に掲載したライバルのネガティブ・キャンペーン（マイナー宣伝）広告では、国民党には伍沢元（立法委員，前・屏東県県長）、羅福助（立法委員）、宋陣営には顔清標（台中県県会議長）という「暴力団」達を紹介していた。前図13の李遠哲の陳陣営に賛同したのも「黒金（暴力団・金権）改革」の必要性があると痛感したからである。

図16（『自由時報』 3月12日付）。故陳誠副総統の息子陳履安氏は96年の総統選挙時に国民党から離党して参戦した。氏には仏教界の支持基盤があるが、今回の選挙は連陣営を支持すると表明した。逆に、宋陣営には顔清標氏とい



図10 『中時晚報』 3月16日付。

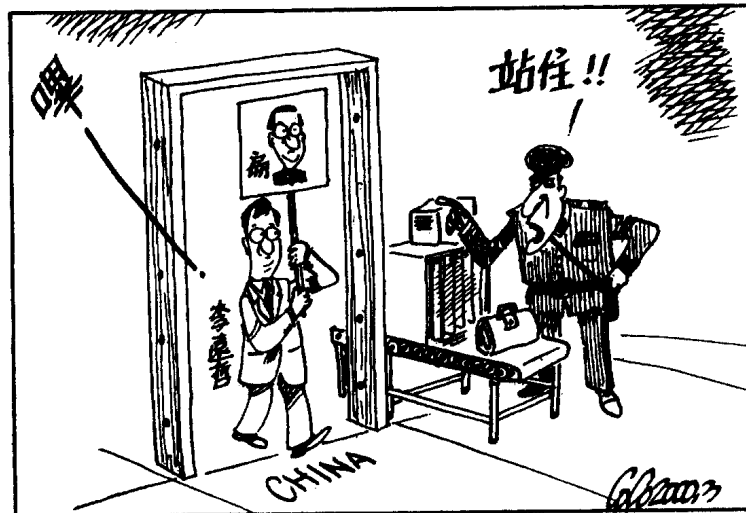


図11 『中国時報』 3月16日付。

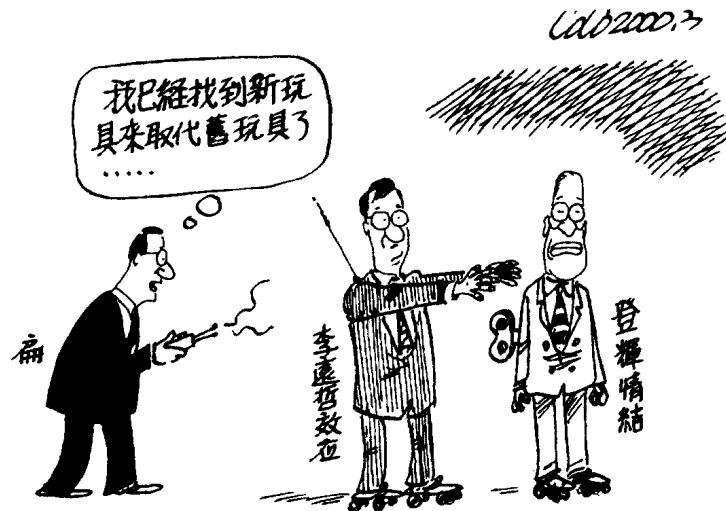


図12 『新新聞』 680期, 3月14日~18日号。



图13 『商業周刊』 3月20日号。

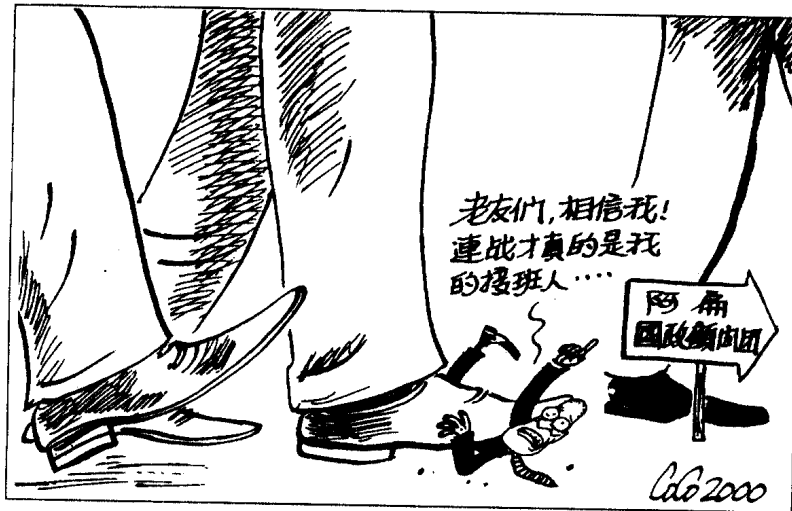


图14 『商業周刊』 3月20日号。



图15 『新新聞』 680期, 3月14日~18日号。

う「黒金」がついていたといわれていた。

図17 (『聯合報』 3月12日付)。関羽の前で、右の候補者は選挙民に「クリーンな選挙こそ神様が守ってくれる」と言った。しかし、左の運動員は「関羽を証人として、曹操に投票し、劉備に投票しないこと」と「買収」を進めていた。今回の選挙でも国民党の「買収」に関する話も公然化してきた (『読売新聞』 3月8日付)。この風刺マンガはそれを表していて、「金権」政治を揶揄しているとも思われる。

図18 (『自由時報』 3月18日付)。「候補者の食事会も食べ飽きたでしょう。投票が済めば、もとに戻るわよ」と、奥さんが言った。食卓には奥さんの手作り料理が並んでいる。運動員のような人は疲れた様子で、服装には「凍蒜」(「当選」の台湾語)と書かれている。「流水席」(無償の食事会)とは公然と行われている「買収」(ワイロ)行為である。

(4) 「挺扁」, 「挺連」, 「挺宋」

「挺」とか「擁」とは支持・賛同すると声明することである。前記の李遠哲や企業家の「挺扁」(陳候補支持), 陳履安の「挺連」などがある。

図19 (『自由時報』 3月12日付)。96年の総統選挙の李総統に反旗を翻し、出馬したのが郝柏村(元行政院院長)であった。郝氏の支持層は軍と「外省人」(中国大陸の出身)であり、氏は「擁宋」(宋候補擁護)を示した。しかし、蒋介石総統と共に台湾に移ってきた軍人は次第に高齢化し、氏の呼び掛けの効果は薄かった。3月14日に連陣営は、故蒋介石総統夫人の宋美齡氏から支持の書簡を発表し、軍・外省系票を奪回することを図り、宋陣営を切り崩す効果を狙った。これも「挺宋」と「挺連」のケースである。

図20 (『自由時報』 3月15日付)。故蒋介石総統の宋美齡夫人は国民党の連候補を支持する書簡を寄せた(「蒋家挺連」)。宋候補は蒋介石と蒋経国総統に泣きつく。「宋美齡夫人は私を理解していない。(疑惑のカネをフトコロに入れて) アメリカで不動産を買ったのは、宋美齡夫人のそばにいたいからだ」。宋候補は国民党秘書長時代の党資金の不正使用金銭疑惑(「興票案」)で私腹を肥した金でカリフォルニア州で5軒の豪邸を購入。このマンガはその金銭疑惑を揶揄したものである。

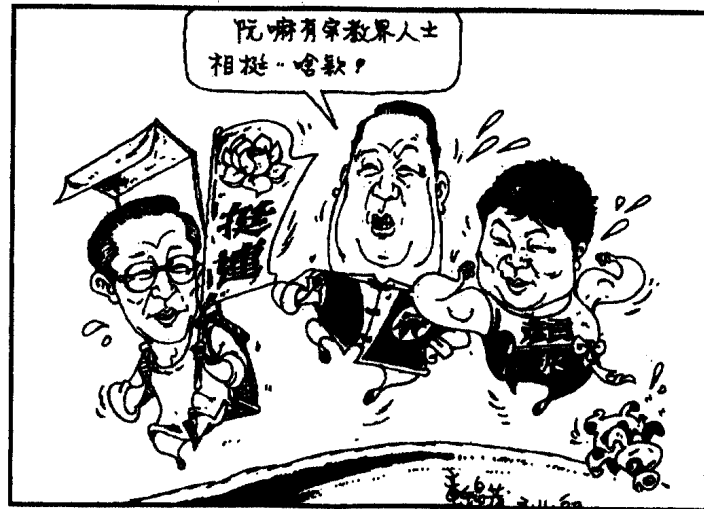


圖16 『自由時報』 3月12日付。

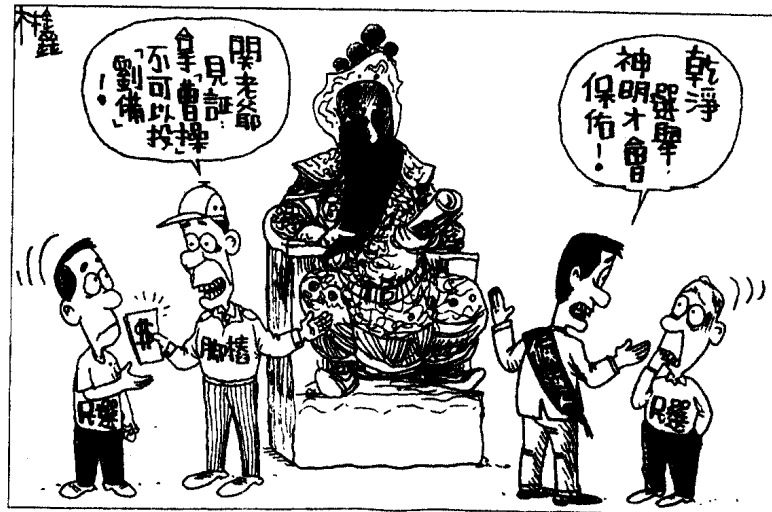


圖17 『聯合報』 3月12日付。

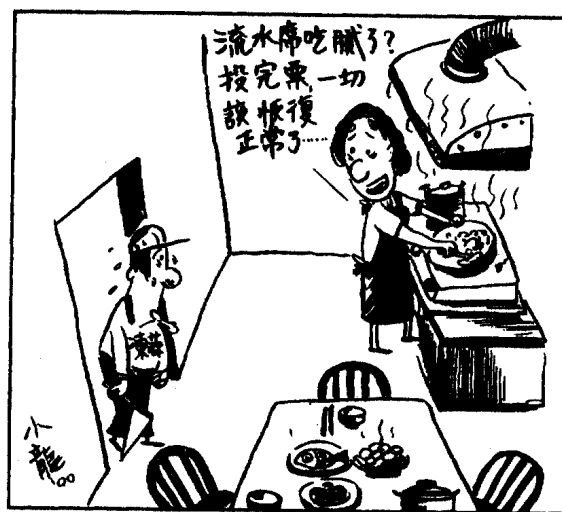


圖18 『自由時報』 3月18日付。

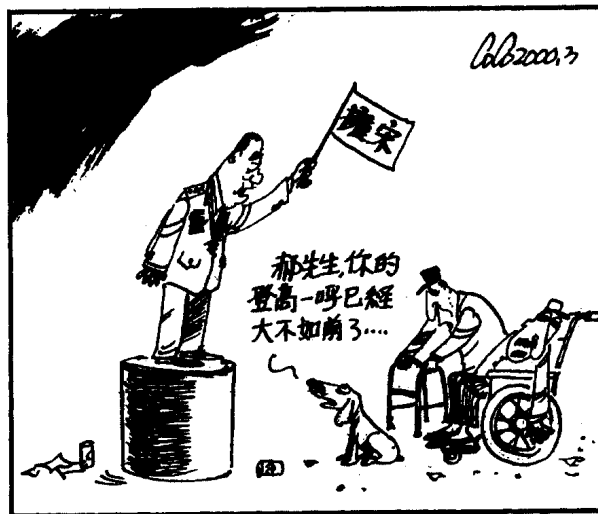


図19 『自由時報』 3月12日付。



図20 『自由時報』 3月15日付。



図21 『自由時報』 3月12日付。

図21 (『自由時報』3月12日付)。国民党党員が次々と他の陣営に移った。例えば、廖正豪・前法務部長（法務相）などが宋陣営支持（「挺宋」）を表明し、離党した。李総統は「腐ったものは離れた。残りは良いものだ」と呟いた。しかし、李総統支持の李遠哲（中央研究院院長）や張榮発（エーバーグリーン・グループ会長）などは陳陣営を支持（「挺扁」）するように転じるようになった。この図は前掲図14に似ている。

図22 (『自由時報』3月16日付)。「秦委員、のぼりを持ち間違ったよ、それは前回の私ののぼりよ」98年の台北市長選挙の時、馬英九（現市長）の候補番号は①番であり、当時の現役市長・陳水扁氏を破った。馬英九市長は連候補を支持（「挺連」）していた。同じく、国民党の秦慧珠立法委員（国会議員）は離党し、宋候補の支持（「挺宋」）に回った。

図23 (『自由時報』3月15日付)。無所属の南投県長彭百頌氏が連候補を支持（「挺連」）、李遠哲と奇美実業の許文龍2氏が陳候補を支持（「挺扁」）と発表。連候補と陳候補はロクロを回し、粘土で壺を造っていた。連候補は「お前の中に俺があり、俺の中にお前がある」と呟く。李遠哲と許文龍はもともと李総統の支持者であったが、総統選挙で陳候補の支持に回ったことを表している。

図24 (『聯合報』3月15日付)。「今日の選挙状況」は混戦状態。誰が当選するか、開票が終わるまでわからなかった。先行きの不透明感によって台湾の株価が暴落を引き起こした。

(5) 株価暴落

総統選挙戦は、証券市場にも大きな影響を及ぼした。3候補横並びの混戦のなか、先行きの不透明感から株価が最大の暴落を引き起こした。3月13日の台北証券取引所の株式指数は9429.6から617.65ポイント（6.55%）と過去最大の下げ幅を記録した。陳陣営は「暴落は人為操作によるもの」と与党の国民党の関与と指摘した。他方、連陣営は連候補に投票してこそ「株価の安定」が保てると、懸命なPRを行った。1月に中台緊張などで証券市場が動揺した時に投入する「国家金融安定基金」（総額5千億台湾元＝約1兆7千億円）を設置したが、野党との調整がつかず、運用ができない。基金の運用先



図22 『自由時報』 3月16日付。

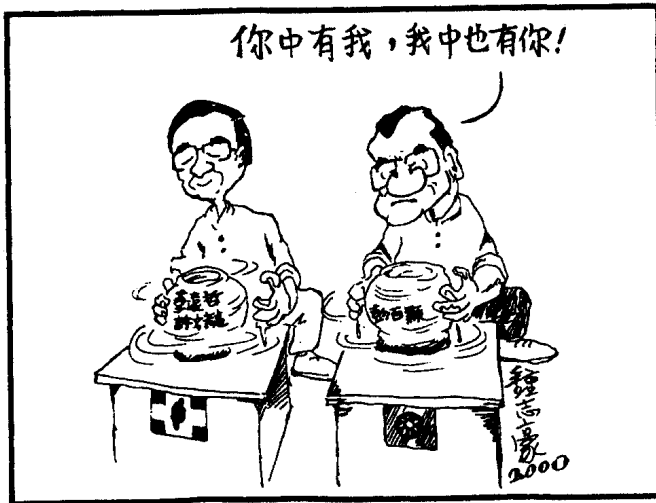


図23 『自由時報』 3月15日付。



図24 『聯合報』 3月15日付。

送りなど選挙への不安感が主な原因であると考えられる。次の幾つかのマンガはそれを示している。

図25 (『中国時報』 3月14日付)。陳候補と宋候補のミサイルが証券市場に命中し、与党の足元が揺るがす。

図26 (『新新聞』週刊誌・第680期 3月14日～18日号) と図27 (『商業周刊』週刊誌・3月20日号)。選挙戦 (ミサイルと恐竜の乱闘) によって、株価 (暴落) が最大の犠牲者になった。

図28 (『自由時報』 3月14日付)。台湾の株価暴落について、「誰が犯人？」と叫んだ。犯人は背後にいたため見えなかった、と5人の候補者のうち、鏡に写ったのが3人。つまり、選挙の先行き不透明のもとになったこの有力3候補が株価暴落を引き起こしたことを意味する。

図29 (『自由時報』 3月15日付)。3月13日に台湾の株価が617ポイントも暴落した。2人の野球少年は証券市場の「家」のガラスを割った。誰が張本人であるか。連候補は陳候補を指す。そして、陳候補は連候補を指す、と互いに他人の責任になすりつけている。

図30 (『自由時報』 3月14日付)。江沢民は不思議そうにテレビを見ていた。「ミサイル演習を発言していないのに、なぜ台湾の株価が暴落したのか？」と。その日、世界 (米、日、中、香港など) の株価は同時安であった。

図31 (『自由時報』 3月14日付)。瀕死 (暴落) に落ちいった株価を上昇させるのは、国民党のドクター連候補であると発言する。与党の強気宣言である。

図32 (『商業周刊』週刊誌・3月20日号)。与党は株を持つ有権者に呼びかける、「国民党に投票してこそ株価が上昇する」。

図33 (『中国時報』 3月20日付)。瀕死した株価の回復は、この投票箱が決める、と看護婦は呟く。

(6) 中国カード

図34 (『自由時報』 3月17日付)。「激情」(感情の激しい) 選挙戦で、中傷・非難合戦がエスカレートになり、選挙民は中国に刺激を与えないよう、冷静を呼び掛けている。

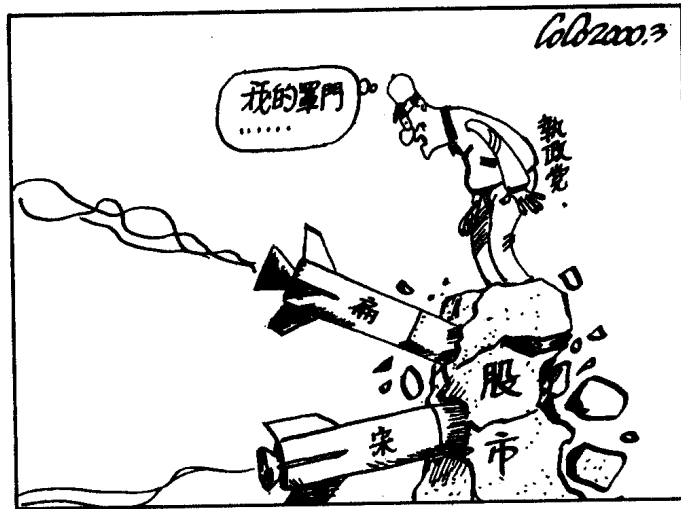


図25 『中国時報』 3月14日付。

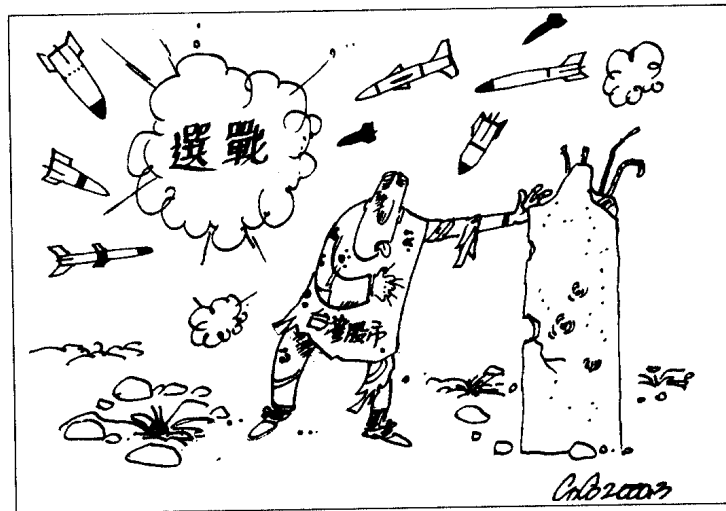


図26 『新新聞』 680期, 3月14日~18日号。

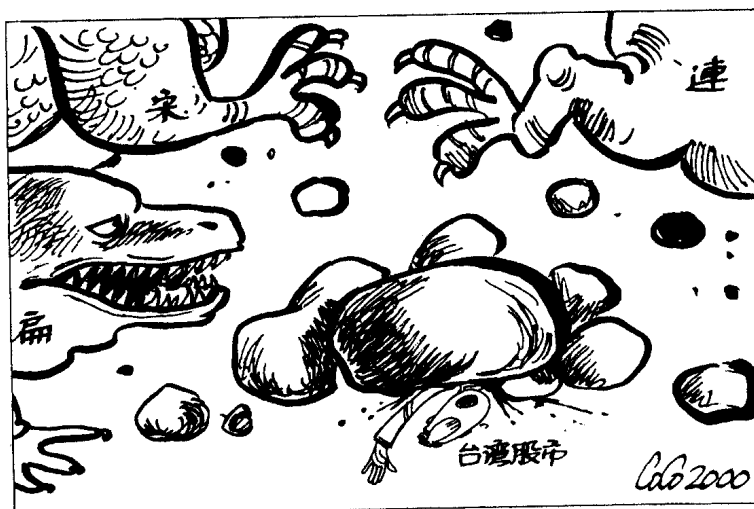


図27 『商業周刊』 3月20日号。



圖28 『自由時報』 3月14日付。



圖29 『自由時報』 3月15日付。

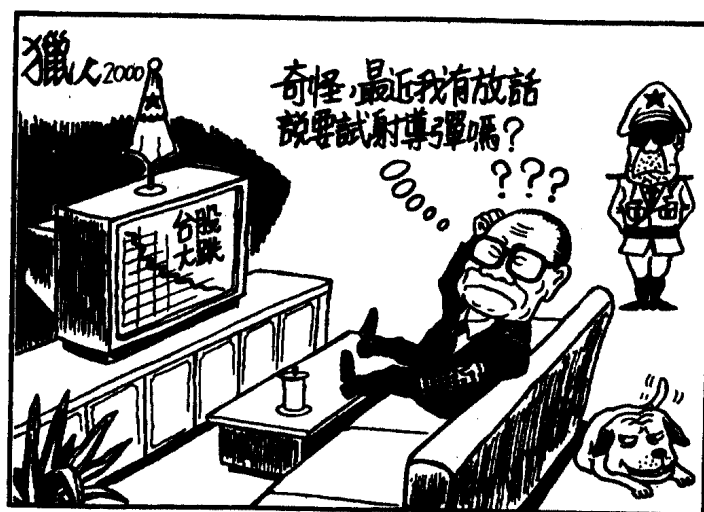


圖30 『自由時報』 3月14日付。

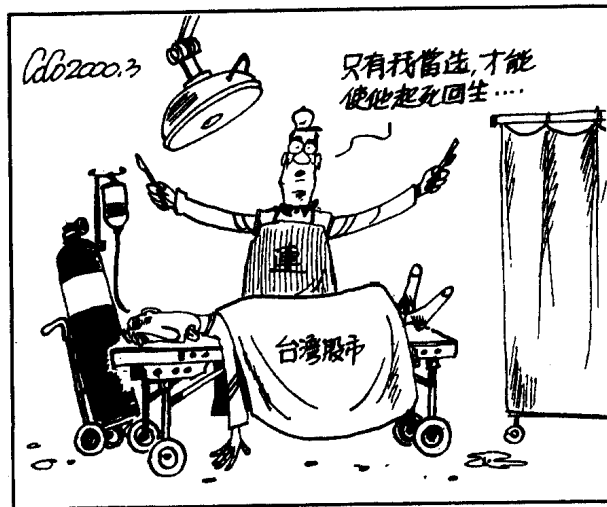


图31 『自由時報』 3月14日付。

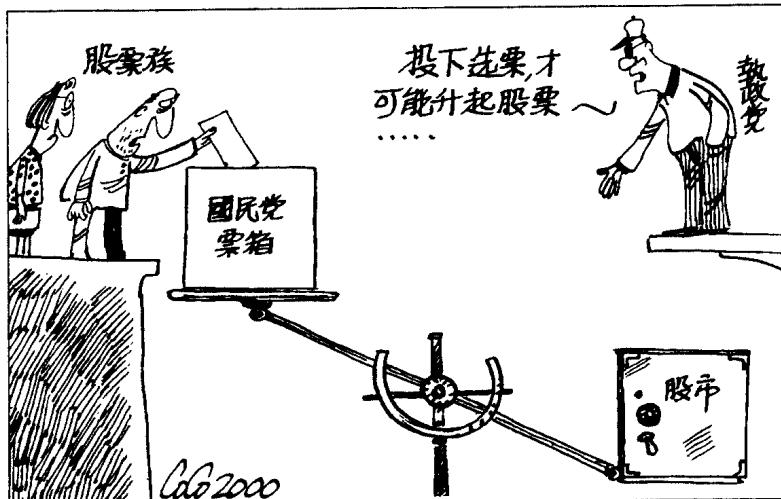


图32 『商業周刊』 3月20日号。

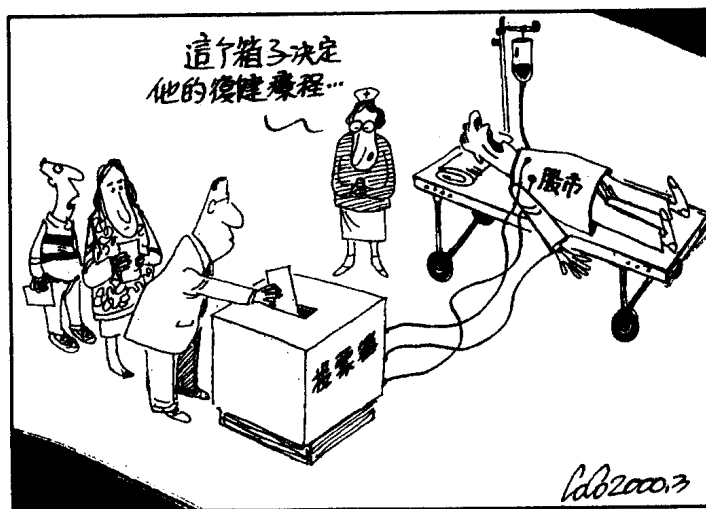


图33 『中国時報』 3月18日付。

図35 (『聯合報』 3月16日付)。有力3候補は「棄保効応」を狙った運動の真っ最中。ところが中国側は2月21日に「台湾白書」を発表、3月11日に唐外相と15日の朱首相の恫嚇発言(「恫嚇カード」)など、選挙戦にどんな影響を与えたのか。蓋を開けると、96年の総統選挙に「ミサイル・カード」、今回の「恫嚇カード」は台湾の住民の不快感を引き起こし、中国が「望まない候補」が当選していた。「ミサイル」と「紙のミサイル」(白書)ともに効き目のない「不発」に終わった。民主化された台湾に対し「文攻武嚇」は、既に効き目のない代物になった訳である。台湾の住民に対する中国側の焦りと無力感が表れている。

図36 (『自由時報』 3月16日付)。江沢民の写真の前で、朱鎔基首相は「大中国狂犬合唱団」の狂犬達を指揮して、台湾新総統誕生を祝う発音練習(「文攻武嚇」?)をしていた。

図37 (『自由時報』 3月16日付)。朱鎔基首相は片手に金属チェーンをもって、片手にニワトリの羽で作ったハタキを振り待ち構えている。有力3候補は「ジャンケンで負けた人が出る」と言った。

図38 (『新新聞』 第680期 3月14日~18日号)。江沢民の台湾独立への警告に対し、台湾は中国の強気発言(恫嚇)の背後になにか秘密武器を持っているか、真相を直ちに調査しろという命令があった。

図39 (『聯合報』 3月16日付)。中国の亡霊(ノー台湾独立)がいたる所出てきた。なんと投票所でも出た。

図40 (『自由時報』 3月17日付)。総統選挙には中国の恫嚇爆弾、金銭爆弾、人情爆弾、「造勢」(決起)爆弾など、誰に投票するか、選挙民は大変である。

図41 (『自由時報』 3月17日付)。台湾総統選挙に中国は「反台湾独立」の1票を投じた。しかし、「投票権が無いため、無効票である」と、中国カードは「不発」のまま終わった結果になる。

(7) 選挙戦の後半戦

図42 (『中国時報』 3月17日付)。マンガでは李総統に党主席を辞めることを要求しない代わりに、17日夜の総決起大会に「土下座(謝罪)」方式で連候補に投票するよう選挙民に要求するとの発言。李総統はこれを聞いてビック

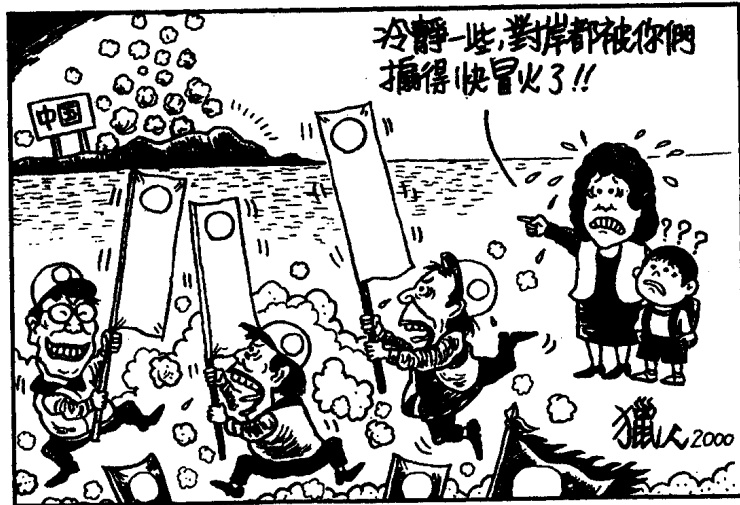


図34 『商業周刊』 3月17日号。



図35 『聯合報』 3月16日付。

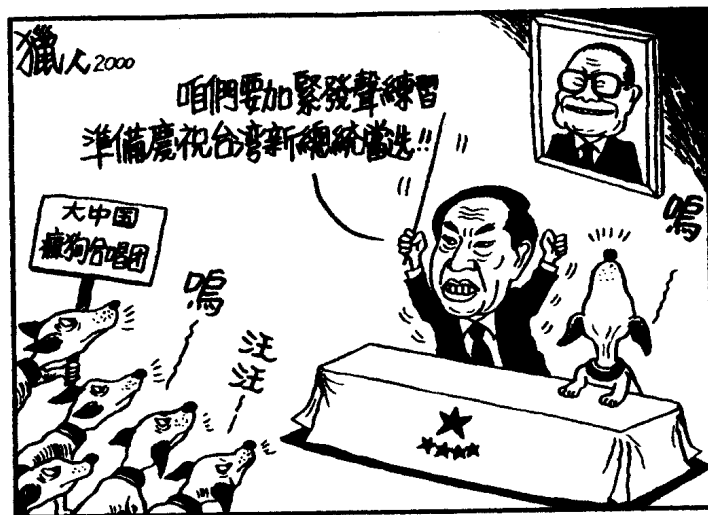


図36 『自由時報』 3月16日付。



图37 『自由時報』 3月16日付。



图38 『新新聞』 680期, 3月14日~18日号。

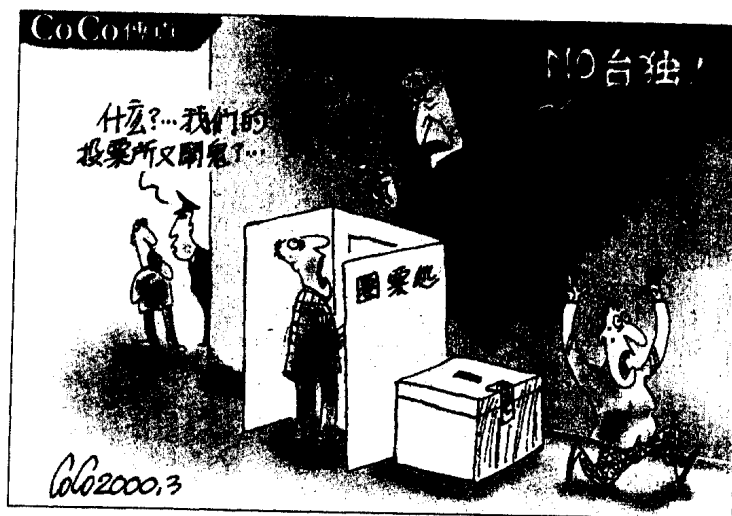


图39 『聯合報』 3月16日付。

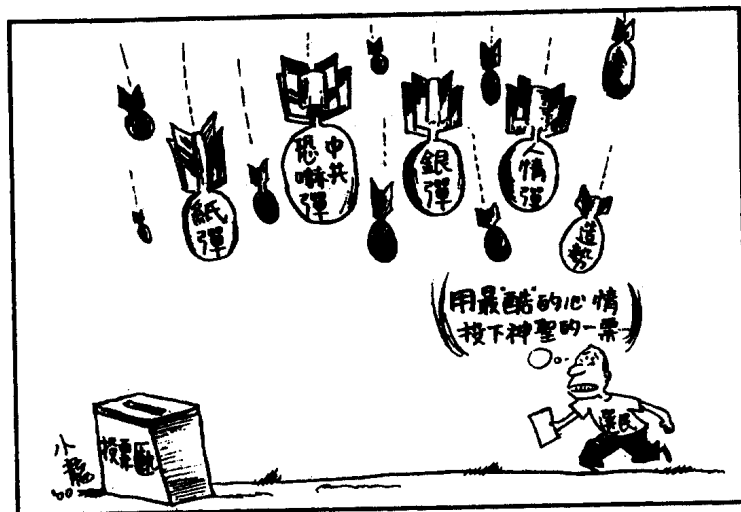


图40 『自由時報』 3月17日付。



图41 『自由時報』 3月17日付。

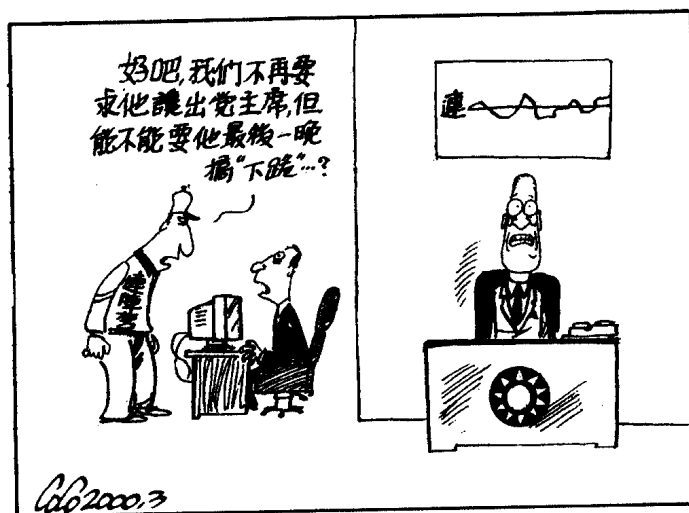


图42 『中国時報』 3月17日付。

りしていた。開票後、連候補の大敗で李総統は9月頃に党主席を辞めると発言した。そして、李総統は宋候補が「親民党」を組織すると聞いて、3月24日に党主席をあっさりと辞任した。

図43 (『自由時報』3月16日付)。陳候補有利との噂によって、宋陣営の焦った選挙対策会議の様子を描いたもの。宋候補は裏の一手が使い尽くし、最後の一手は、「首吊り」や「土下座」のパフォーマンスを演じるか、と揶揄したものである。

図44 (『自由時報』3月18日付)。選挙戦の影響で精神的興奮がやまない人々が寺廟で治療してもらっている。彼らは「持ち株族」で株価暴落などの影響を受けた人達や、支持候補の当選を信じ、その落選で精神的打撃を受けた人達である。前回96年の総統選挙は(候孝賢監督の「悲情都市」にちなんで)「悲情」選挙、今回は「激情」選挙と呼ばれた。この「激情」選挙により民進党の大勝利と国民党の大敗が引き起こされ、選挙戦の後遺症や精神的に異常を訴える人が多く発生した。

(8) 新総統の選出

図45 (『聯合報』3月18日付)。いよいよ選挙日の当日。選挙民の一票は台湾の将来の行く道を決める日である。お気付であろうが、地面の模様は民進党の党旗の紋様をあしらったものである。これを描いたマンガ家はこの時点で、陳候補が圧勝すると予言していたであろう。そして、当選後の民進党の総統はどこに行くのか。

図46 (『自由時報』3月18日付)。同日の他紙のマンガでも台湾選挙民の投票の様子が書かれている。投票箱の側に立っているのが李総統、クリントン大統領、江沢民総書記である。ここで書かれている文字とは、「どんな外部の干渉も、台湾人民の投票に影響することが出来ない」。開票の結果、中国の「恫嚇カード」が不発に終わったこと。

図47 (『自由時報』3月19日付)。中傷合戦の末、18日の夜に新総統が誕生した。選挙戦時にテレビ、新聞などではライバルのマイナー宣伝で候補者は正にドロコ(非難・中傷)合戦の状態である。

図48 (『自由時報』3月19日付)。タンキー(道教の霊媒者)に扮した朱鎔



図43 『自由時報』 3月16日付。



図44 『自由時報』 3月18日付。

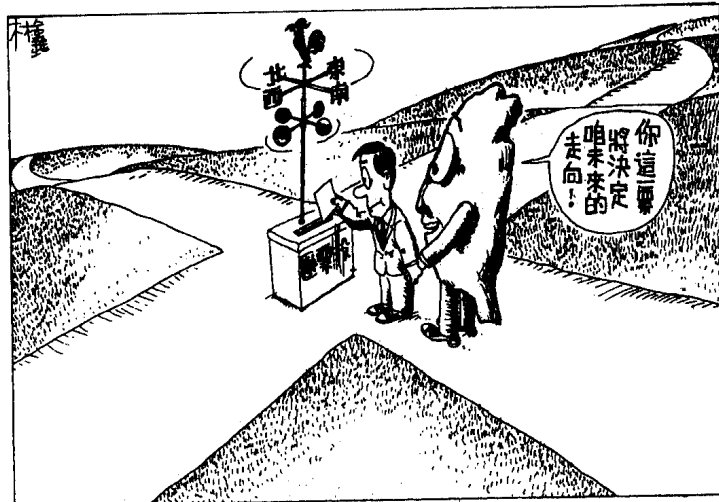


図45 『聯合報』 3月18日付。

基首相が「文攻武嚇」の鐘を鳴らす。李総統は扉を開けて、「私達が（総統選挙の）祝い事で、皆が喜んでいるのに、あんたは犬にでも噛まれたいのか」と、笑っている。中国の「文攻武嚇」が、台湾の人民に効き目ないことを嘲笑していたことを意味した。

図49（『経済日報』3月19日付）。総統選挙戦の結果、陳水扁と呂秀蓮の総統・副総統コンビが選出された。

図50（『中国時報』3月19日付）。総統府の上に民進党の党旗。「変天したのか」と1人は言う。「変天」とは、政権交代や革命の意味である。そして、「変天」は天気が変わったことも意味する。「太陽はやっぱり東から昇ってるけど……………」と奥さんは言った。国民党の党旗は太陽（青天白日）である。

図51（『中国時報』3月19日付）。総統選挙の結果、陳次期総統が誕生した。陳総統は下に向かっていた中国のミサイル（武嚇）に「アカンベ」。中国の最も望まない候補を選ぶ結果になった。中国にとって好きか嫌いかを問わず、少なくともこれからの4年間は陳総統を相手にするしかない。そして、江沢民総書記の任期はあと2年であることも忘れてはいけない。

図52（『聯合晩報』3月19日付）。陳次期総統は「皆さんの金儲けを保証します」と手を挙げて、外資にラブコール。「台湾独立反対」と書いた中国のミサイルは陳総統にターゲットを合わせていた。

図53（『聯合晩報』3月19日付）。陳次期総統は地塁感知器をもって進め、「兩岸危機」という地塁に感知して、鳴った。台湾の企業家は「南無阿彌陀仏」と呟いて、陳氏についていた。

図54（『聯合晩報』3月19日付）。陳総統よ、御馳走の「漢滿全席」（政見演説で承諾した約束）を出して下さい。有権者の手には「支票」（小切手）を持っていた。台所のコックさんは「財源」と「増税」の鍋を持っていたが、中は空っぽである。これから陳政権はいかにして舵取りをとるのか。

図55（『自由時報』3月19日付）。持ち株族は陳総統に「当選したら、株価は1万ポイントを超えと言ったよね」。陳総統は「保証する」と答えた。しかし当選後、台湾の株価は下落した。

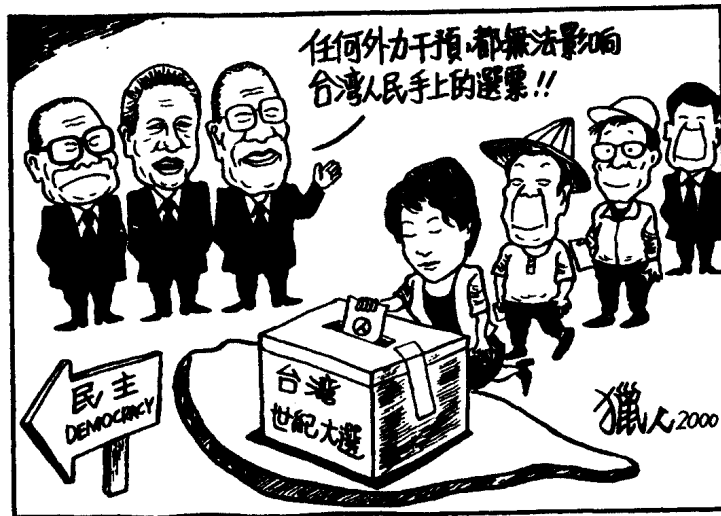


図46 『自由時報』 3月18日付。



図47 『自由時報』 3月19日付。



図48 『自由時報』 3月19日付。



図49 『経済日報』 3月19日付。

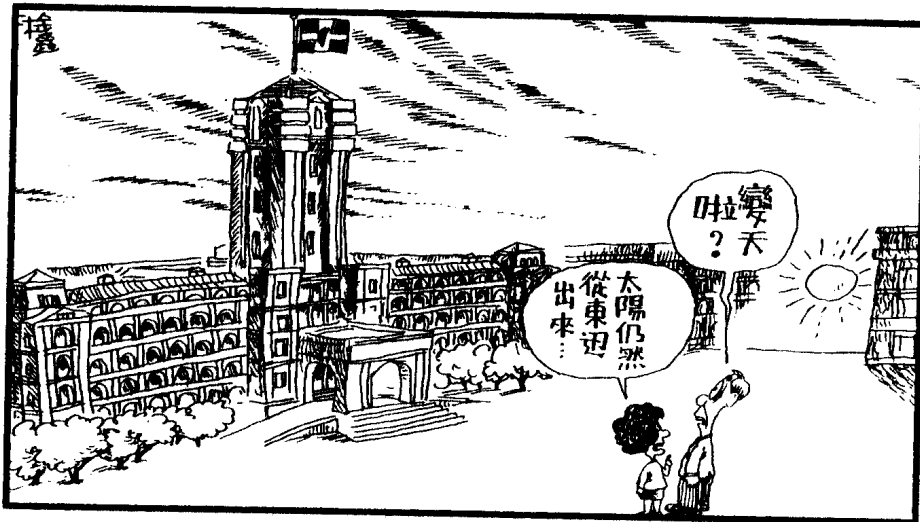


図50 『中国時報』 3月19日付。

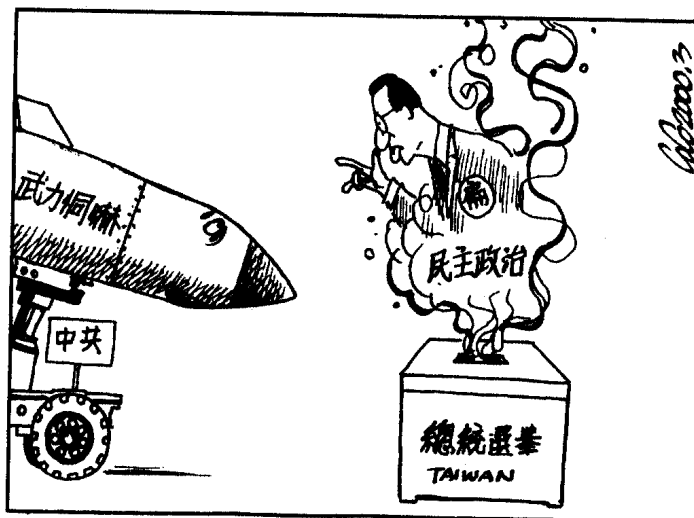


図51 『中国時報』 3月19日付。



図52 『聯合晚報』 3月19日付。

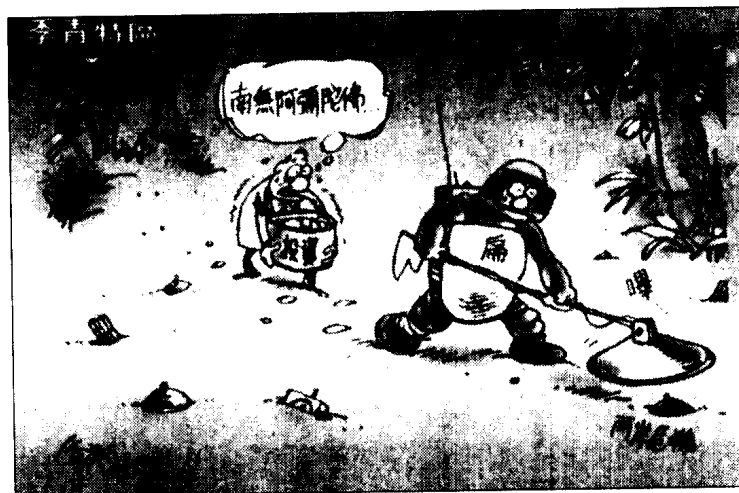


図53 『聯合晚報』 3月19日付。



図54 『聯合晚報』 3月19日付。

(9) 「弱勢総統」(投票支持率の低い総統)

図56 (『聯合晩報』 3月10日付)。総統選挙は5組の総統・副総統が参加しているが、主としては①宋候補、②連候補、⑤陳候補の3つ巴状態が続いていた。アンケート調査でも各陣営は50%以上の支持率を得ることが難しいという結果がでた。このような支持率の低い総統が、中国と交渉する場合、果たして「全民」を代表できるか、疑っていることを示している。この3つ巴の状況では誰も50%以上の支持率を得ることが難しい。陳候補に投票しないことは、決して陳候補に反対していることではなく、他の候補に投票したほうが良いと考えた結果である。投票日の翌日、TVBSの世論調査では56%の選挙民が選挙の結果に満足していた。同日の『聯合報』の世論調査でも57%の民衆が民進党政権に自信を持っている、との報道がなされた。

IV. おわりに

元来、台湾の総統選挙自体は国際ニュースのなかでは中位の重要性であると思われるが、中国カードの存在や野党初の総統誕生で世界級のビッグなニュースになった。当選した翌日の『朝日新聞』など各紙もトップ欄でこの情報を伝えている。

かつて作家の柏楊氏は、雑誌に孤島に漂流した親子がこの島を統治し、親子ともに島の王になっているさまを描いた風刺マンガを載せた。このマンガは当時の蒋介石・蒋経国総統親子を風刺しているということで、反乱罪に問われ捕らえられた。白色テロ時代の出来事である。

ここに掲載した風刺マンガは台湾のコンビニで売られていた一般の新聞であり、別に特別に入手したものではない。一国の元首を風刺した内容のために、白色テロ時代であれば、画家は捕らえられてしまっているだろう。これが今日の台湾で許されるので、台湾の民主化をはかる一種のパラメーターと見た場合、その成熟の度合いはかなり進んでいるといえよう。一方、今日の中国では社会問題の風刺マンガは許されるが、自国の元首を揶揄の対象になることは許されない状況がある。

国民党は台湾を統治した51年の閉塞感があった。李登輝総統時代に民主化

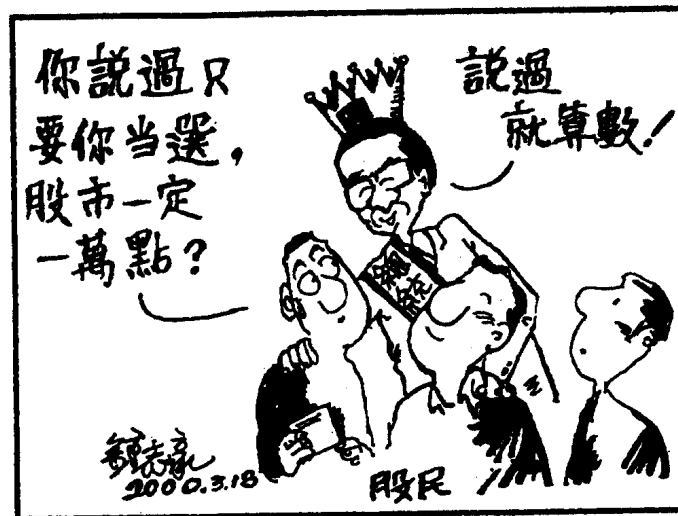


図55 『自由時報』 3月19日付。

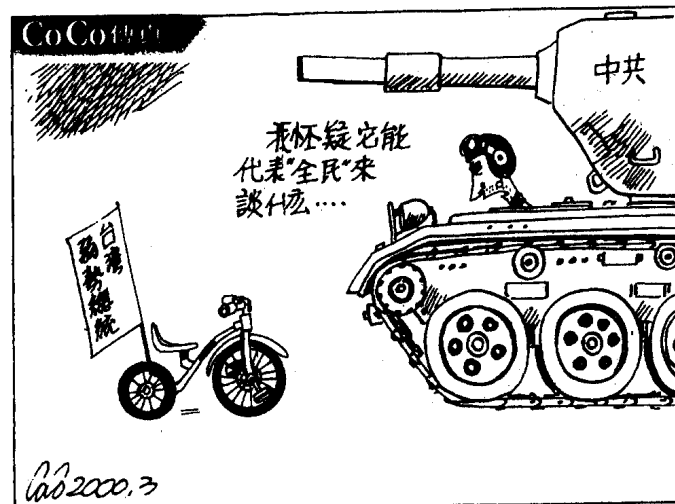


図56 『聯合晚報』 3月10日付。

のパンドラの箱を開き、過去に発生した二二八事件や白色テロなど負の遺産を拭き落とした。そして、李登輝総統時代のプラスの遺産として「台湾人意識」が残された。

政治大学の劉義周助教授は94年から99年の世論調査を分析し、論文「台湾民衆の新しいアイデンティティ」を書いた。論文によると、「私は台湾人」と答えた比率が28%から44%に激増した。逆に、「私は中国人」と答えた比率は24%から僅か10%に減少した。そして、台湾紙の最新世論調査の結果として、「現状維持」志向賛成86%、「政治会談」賛成79%、「中国の1国2制度」反対79%を発表した（『朝日新聞』 3月17日付）。

台湾の民衆は、従来の「不急統不急独（急いで統一せず・急いで独立せず）」という「現状維持」からより「台湾人意識」を強める志向へと価値観の変化を緩やかに移行を見せている。その結果、統一を焦る中国に対して、新たに「台湾民意の壁」という難題を押しつける結果になった。それが今回の台湾総統選挙の最大の意義といえるのではないだろうか。

（参考文献）

- (1) 台湾の『中国時報』、『中時晩報』、『聯合報』、『聯合晩報』、『工商日報』、『經濟日報』、『自由時報』、『中央日報』などの新聞紙。
- (2) 台湾の『商業週刊』、『新新聞』、『中華週報』などの週刊誌。
- (3) 『朝日新聞』、『日本經濟新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『産経新聞』、『西日本新聞』などの新聞紙。
- (4) 伊原吉之助「台湾の総統選挙と政権交代」『問題と研究』第29巻第8号、2000年。
- (5) 渋谷司「台湾次期総統選の分析」『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、2000年3月。
- (6) 渋谷司「台湾次期総統選のゆくえ」『海外事情』拓殖大学海外事情研究所、2000年2月。
- (7) 塚本元「陳水扁総統を誕生させた台湾の民心」『世界』2000年5月。
- (8) 伊藤潔「陳水扁新総統は台湾のグライ・ラマか」『文藝春秋』2000年5月。
- (9) 酒井亨「台湾新総統陳水扁」『中央公論』2000年5月。

（後記）本論は総統選挙期間に台湾で調査し、入手した資料によって構成したものである。